

第一回 国際バイオ燃料基準検討会議（議事概要）

日 時： 9月17日（水）16:00～18:30

場 所： 第2特別会議室

出席者：

（委 員）

熊崎 実 筑波大学名誉教授

小池 一平 全農営農総合対策部長

澤 一誠 三菱商事新エネルギー事業第二ユニットシニアマネージャー

染 英昭 （財）中央果実生産出荷安定基金協会副理事長

（専門委員）

小泉 達治 農林水産政策研究所 主任研究官

林 岳 農林水産政策研究所 主任研究官

（事務局）

農林水産省大臣官房環境バイオマス政策課 ほか

総論

- 基準・指標の策定に当たっては、今後のバイオ燃料の持続可能な発展に寄与すべきものとの基本的考え方については了承。
- 多くの国々で基準や定義の議論が進んでおり、それぞれの考え方や意見、それらが出てくる背景等に関する情報を把握することが重要。
- 環境影響については、地域によって天候条件等、前提となる条件が異なるため、基準等についてはこのような差異を十分考慮し、必要に応じてアジア版などの地域ルールを提案すべき。
- バイオ燃料原料用の農業生産について、通常の農業から切り離して議論するのは困難であり、避けるべき。
- バイオ燃料原料として、永年性作物の観点ももっと取り入れるべき。
- 我が国として守るべきものに焦点を当て、それを守る理論武装を行う必要。
- 国内並びにアジア等海外でバイオエタノールを生産する観点からは、基準が作成されることは望ましい。但し、偏ったものにならないよう十分配慮してもらいたい。
- バイオ燃料の促進は、農林水産業といった一次産業の持続的発展が原理原則である。

各論

- バイオ燃料のLCA分析については、何を「副産物」と位置づけるか、副産物にかかる温室効果ガスの排出をどのように評価するか、幅広く検討すべき。
- 土地利用変化を見る場合の基準年として20～30年程度と議論されているようだが、これは長すぎる。
- 温室効果ガスの排出削減効果について、定量的な基準を設定すべき。
温室効果ガスについては定量的な数値で議論できるところまで作業が進んでいる実態にあり、定性的な指標ではすまされない可能性が高いのではないか。
- 温室効果ガスの削減効果（LCA）について、定量的な基準を適正に設定することが望まれる。例えば、原料の種類によって世界一律で何%と決めると、地域的な事情が反映されず、適正なLCA評価が出来ない可能性がある。従い、この算定基礎として適用される地域毎（特にアジア）のインベントリーデータの充実が必要である。
- 土壌については、欧米は面的広がりを含めて「土壌の質」と考えており、我が国と概念が異なることに留意する必要。
- バイオ燃料生産の間接的な影響については、定量的な評価は困難であり、定性的にうまく評価する方法を考えることが必要。
- 食料と競合しないバイオ燃料とは何かという点について、基準・指標を設定する必要がある。第1世代は勿論、第2世代も含めて、この基準・指標設定が適正に行われる様に、必要に応じて、我が国としてもしっかりと主張していくべきである。
- 第2世代バイオ燃料を進める観点に立って、基準・指標づくりを検討すべき。